

一 次の文章を線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを書きなさい。

- ① シンソウを明らかにする。
② 製品をバイバイする。
③ 国が生活をホシヨウする。
④ あの人の行動はイジヨウだ。
⑤ オゴソかに式が進行する。
⑥ 目にもとまらぬ早業を見せる。
⑦ 激しい吹雪について進む。
⑧ 妹はすぐ泣き真似をする。
⑨ 健康に留意して過ごす。
⑩ 市内は均一料金です。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注意) 字数制限のある問題は、句読点や記号なども、一字として数えます。

① 「クワオーン」

② 夕焼けのオレンジの空に、犬の一声が、虹の輪のように響きわたった。
「えっ？」

塾からの帰りの道を歩いていたぼくは、自分の耳が変になったのかと思った。

「空から犬の声なんかが、聞こえてくるわけないよな……」

そうつぶやきながら、玄関のドアを開けた時だ。お母さんがリビングから飛び出してきた。

③ 「ヒロキ、急いで。今、川村動物病院から、電話があったの！」

「えっ？」

「カイが、カイが……。カイの呼吸が止まったって！」

④ 「そ、そんな……」

ぼくちの薄茶色のコーギー犬カイは、昨日から前足を踏ん張って座ったきりだった。そして、横になろうともせずじっとしたままだったんだ。そのようすがあまりにも変なので、お母さんがカイのそばに布団を持ってきた。そして、夜の間、ずっとカイを見守っていた。

カイは一度も横になることはなく、息をハアハアさせながら、前の両足を踏ん張って、座り続けていたみたいだ。

今朝、カイを病院に連れて行ったお母さんの話だと、レントゲン写真に写ったカイの肺を見た担当の杉野先生が、顔をくもらせたんだって。

「先生にね、『肺炎ですね。かなり悪いので、入院させて治療しましょう。何か肺に入って炎症を起こしたのかもしれない』って、いわれたの」
カイは、家にもどってくることなく、そのまま入院した。

横にならなかったのは、寝るとよけいに肺の呼吸がしにくくなるから、前足を踏ん張って座ったままだったみたいだ。

そういえば、カイは、一週間ほど前、あわてて水を飲んでいて激しくせき込んだ。そして、そのあとからずっと、コホコホと小さな咳をしていた。もしかしたら、あの時の水が肺に入ったんだろうか。

ぼくとお母さんは、急いで車に飛び乗った。

⑤ 運転しているお母さんは、

「落ち着いて、落ち着いて……」

って、さつきから何度もつぶやいている。

ぼくは、心臓がドキドキして、息が苦しくなってきた。

その時、スマホのバイブの音が聞こえた。助手席に置いてあったお母さんのバックの中からだ。

「ヒロキ、見てみて！」

ぼくは、後ろの席から手を伸ばして、スマホの画面を見た。

「動物病院からだ！」

「出て、早く！」

スマホから、男の人の大きな声が響く。

「今、どちらですか？ 早く、早く来てください！ 心臓マッサージをしています！」

動物病院に着くとぼくとお母さんは、転がるようにして診察室の奥の処置室に入った。

部屋の真ん中にある処置台の上で、カイは酸素マスクみたいなものをつけられていた。杉野先生が何度もカイの胸を強く押さえている。心臓マッサージ？

カイは赤い舌を口から長く出して目を閉じて、まったく動かなかった。

「カイ、起きて、起きてっ。ひとりぼっちで、遠いところに行ってしまったくないで！」

ぼくは、カイにだきついて、叫び続けた。

驚いたことに、ぼくがああ空の声を聞いたのと同じ時間ぐらいに、カイは呼吸が止まったみたいだ。もしかしたら、カイがぼくにお別れにきたんだろうか。

ぼくたちは、花の絵がいっぱい描いてある段ボール箱に寝かせてもらったカイを、車に乗せて家に連れて帰った。

ぼくは、帰る間、箱の中のまだあたたかいカイの身体をずっとなでていた。

カイの身体はあたたかいけど、もうぴくりとも動かない。

カイとの思い出が、いっぱい浮かんできて、涙があふれてきた。

玄関に着いて、カイを家の中に入れた時だった。門灯や玄関の入り口や、家の中の明かりが、全部バツと消えたんだ！

それは、一瞬のことだった。「あっ！」っと、ぼくたちが声を上げたと同時に、明かりはまたついた。

「な、なに……。この家に十五年間暮らしていて、こんなこと初めて……」

お母さんは不思議そうだった。ぼくも、驚いた。

「もしかしたら、カイが『家に帰れて、うれしい』っていうメッセージを、送ってきたのかもしれないわ」

「えっ？」

「動物は、電気のスイッチを使ってメッセージを送ってくるようなことがあるって、前に聞いたことがあるわ……」

だけど、カイからのメッセージは、そんなことだけでは終わらなかった。

カイを空に送った、次の日のことだった。

ぼくはまだカイがいらないなんて信じられなくて、リビングのソファにぼんやりとすわっていた。

⑦その時、目の前のテレビの画面が、バツと音を立てて映し出された。

リモコンのスイッチは、全く触っていないのに、画面が突然出てきたんだ！

ぼくは、声も出せずにその画面を見つめた。画面には、黒いラブラドルがケーキを前にして、外国人の家族に囲まれて座っていた。

ケーキには、ろうそくの火がともっていて、ゆらゆらゆれている。

「ワンッ」

黒い犬が一声ほえた時に、その息がかかったのか、ケーキの上のろうそくの火が消えた。

周りの人達は、大はしゃぎで笑いながら、

「お誕生日、おめでとう！」

といって、犬の名前を呼んでいた。

「何で、テレビが勝手にについて、しかも、楽しそうな犬のシーンなわけ？」

部屋には、ぼく一人だけしかない。

今、目の前で起こっていることを、だれにも確かめられない。

「テレビ……、壊れてる？」

そうつぶやいて、ぼくはテレビのスイッチをリモコンで切った。

それから一か月ぐらいの間に、同じようなことが何回か起こったんだ。

夜にお父さんとお母さんと一緒に夕飯を食べていたら、またテレビのスイッチが勝手についた。そして、画面が急に映し出された。

画面には、今度は、白い犬がアニメで出てきていた。犬はうれしそうにしっぽをふって、座っていた。

「えっ、どうしてテレビがつくの？」

お母さんは驚いて、持っていたおはしを落としそうになった。

「ヒロキ、リモコン触ってないよな？」

お父さんも、不思議そうにテレビの画面を見ながらいった。

「触ってない……。前にも、同じようなことがあったんだ」

ぼくは、その前の黒い犬の画面のことをお父さんたちに話した。

「なんで……。なんで、テレビが勝手につくのかしら」

「しかも、いつも、犬が出てくるんだもん。不思議だよ」

そんなことが何度か起こって、最後にテレビが勝手についた時は、画面に犬は映っていなかった。何人かの人たちが、ドラマの中で話をしていて。けれど、画面に映ってはいなくても、遠くから犬の鳴き声が「ワンッ、ワンッ」って、響いてくる場面だった。

その時は、ぼくとお母さんと二人でいたから、間違いじゃない。二人で顔を見合わせたんだ。それっきり、テレビの画面が勝手につくことはなくなった。

お父さんもお母さんも、そしてぼくも、もう分かっていた。分かったんだ。

カイが、お別れに来てくれてるんだってことが……。

いつも楽しそうな犬の様子が、映し出されるテレビ画面。

少しずつ遠くなっていくような、犬の気配。

「きっと、カイは『幸せだったよ、楽しかったよ』って、いいたかったんだよね」

多くの言葉に、お父さんもお母さんも「うん、うん」とうなずいた。

注1 ラブラドルⅡ犬の種類

(うたかいずみ著『カイがくれた メッセージ』より)

問1 傍線部①「クウォーン」とありますが、この声はどのようなメッセージであったと考えられますか。本文中から十二字で書きぬきなさい。

問2 傍線部②・③の「えっ？」で、「ヒロキ」の頭の中に浮かんだことを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア カイの呼吸が止まったということ。

イ 変な音が聞こえて驚いたということ。

ウ カイの病気がそんなに悪かったんだということ。

エ 自分の悪い予感が当たったということ。

オ カイが死んでしまったということ。

カ 自分の耳が変になったということ。

問3 傍線部④「ぼくちの薄茶色のコーギー犬カイは、……(中略)……横になろうともせずにじっとしたままだったんだ」とありますが、次のa・bに答えなさい。

a 「カイ」がそのようになってしまった直接の原因を本文中のことで書きぬきなさい。

b 「カイ」がどうしてそのようにしていたかの理由を、本文中からそのことがわかる一文を探し、最初と最後の五字で答えなさい。

問4 傍線部⑤「落ちていて、落ちていて……」とありますが、そのときの「お母さん」の気持ちが最も表現されている行動の一文を本文中から探し、最初と最後の五字で答えなさい。

問5 傍線部⑥「遠いところ」とありますが、「カイ」と「ヒロキ」との美しい思い出を考えて、そこを視覚的にどのように表現していますか。本文中から書きぬきなさい。

問6 傍線部⑦「その時、目の前のテレビの画面が、バツと音を立てて映し出された」とありますが、このような現象が三回起こったことで、「ヒロキ」「お父さん」「お母さん」は何かを理解できたと考えられます。その何かを本文中から二十字で書きぬきなさい。

問7 次にある文はもとも本文中にあったものですが、本文中のどの文の前に入れたらよいですか。その文の最初の五字を答えなさい。

カイは、足が短くてしっぽもほとんどない。

おしりをふりふり、うれしそうにじゃれて、ぼくの周りにまわりついてきたカイ。

家の庭でボールを投げると、足は短いものすごい速さで取りに行ったカイ。

ぼくが学校でいやなことがあって悲しい時、大きな耳をぴんと立てていつもそばに座って、話を聞いてくれたカイ。

問8 この文章は大きく三つの段落に分けることができますが、第二段落・第三段落の最初の五字を答えなさい。

問9 この文章の表題は『カイがくれた メッセージ』です。a 「カイ」が最も伝えたかった「メッセージ」とはどのような内容ですか。本文中から書きぬきなさい。b その「カイ」の気持ちを象徴している表現を本文中から書きぬきなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注意) 字数制限のある問題は、句読点や記号なども、一字として数えます。

先年イギリスで、日本展が行われたが、そのテーマは、じつは「日本の間」^{注1}というコンセプトであった。

思えば昔になるが、日本のほこる前衛作曲家・武満徹氏^{注2}が、私が『インテリア』という雑誌に書いた「間」についてのエッセーを、京都の古本屋で買って読んでくれたと言い、たいへんショックだったと語ってくれたのを今も覚えている。

私も嬉しく、**A**という思いであった。その論文は、私の第一評論集『伝説の逆説』(一九六二年)に収められている。私にとっては、日本文化論へ

の出発であった。

「間」という言葉を、私たちは日頃よく口にしている。たとえば「間が抜ける」「間に合う」「間が悪い」などとすぐ思いつくが、ほかにまだまだある。しかし、その正体はと問われると、これに答えるのは、なかなかむずかしい。

ちなみに、広辞苑をみると、

- ※ (1) 物と物、または事と事とのあいだ。間隔。
(2) 長さの単位。
(3) 家の内部で、屏風・ふすまなどによって仕切られたところ。
(4) 日本の音楽や踊りで、所期のリズムを生むための休拍や句と句との間隙。
(5) 芝居で、余韻を残すために台詞と台詞との間に置く無言の時間。

などと出ている。

なかなか広がりがある、複雑微妙、かつ深刻な言葉のようでもある。

たとえば、能や歌舞伎では、息づまる音の空白があつて、耐え切れなくなつたところでポンと鼓が鳴る。この息づまるような空白も、まさしく「間」だ。これら「間」の定義として挙げられているものを、もう少しわしく突っこんで考えてみると、(1)の物と物のあいだというのは[B]である。また事と事とのあいだというと、とくに音楽の場合などは、[C]と[C]の切れ目だ。

とすると「間」と一言でいっても、日本人は無意識に使い分けているが、物理的に時間と空間のけじめがないことを発見したのは、まさにアインシュタインで、これを外国語に翻訳するとしたら、さぞかし困るであろう。

さて、物の空間的隙間と、時間の切れ目とは、もちろん意味が違う。さらに、空間や時間だけでなく、人間の生き方、人間同士の関係、それどころか人間と状況、人間と自然との関係にまで及んでくると、先ほど挙げた「間が悪い」「間が抜ける」といったような言い方も生まれてくるわけである。

ここで、対照的な用法を比較してみよう。一つには「間をとる」とか、「間合いをはかる」など、「間」というものがひじょうに積極的に意識される場合がある。

たとえば剣道で、よく「間合いをはかる」という。間隔を保つことによって、より有効な打撃に備えるわけだ。したがって、これはもともと緊張した関係である。しかし厳密に言えばそこには何もない。竹刀と竹刀、剣と剣は触れていないのだから、いわば[D]である。

何もないのだけでも、もともと緊張したところだ。これが「間合いをはかる」「間をとる」である。[E]だから、その「間」を外すと、やられてしまう。命を落とすことになる。

一方、「間が悪い」「間が抜ける」という言葉になると、これは本来何かあるべきものがなくなってしまうことを意味する。といっても、もともと「間」

などというものは、実体がないのである。だから大したことはないのではないかとも思えるが、ところが実際には「間抜け」といえば、最悪である。

そのように考えると、時間、空間に限らず、「間」というものは、実際は実体がないのにもかかわらず、じつはいちばん大事なもので、充実していないてはいけないということになる。

それを充実させるかさせないかで、「間をとる」という場合もあるし、「間がとれなかった」「間が抜けた」という場合もある。剣術などで極意に通じた人は、「間合いをつめる」そして、あえて「間を外す」というようなことまでする。実体のないものが重要な機能を果たしている。

これは西欧の近代合理主義的な考え方では、どうしても理解できない日本文化の特質のひとつである。
古典芸能を例にとると、わかりやすい。たとえば能である。ふつつ近代風に考えると、「間」というのは、トントンというリズムだと思うのだが、そうとばかりは言えない。辞書でも、「間」について「リズムミカル」であるとか、「全体のリズム感」などと、なかなか苦しい言い方をしている。

リズムというものは、規則的なリピートだと思う。しかしそれでは「間」にならない。「間」はのびちみするリズムである。

では「間」とは何か。世阿弥は、能楽についての彼の著述のなかで、これをひじょうにデリケートに述べている。要するに、能の芸のいちばん大事なことは、すべてのテクニック、身体表現をただ一瞬に凝集してゆくことだという。

つまり、内面性をひたすら持続することにある。ところがその持続を表現するために、外見的世界を断ち切る、切って切っていくというところに、じつに日本的というか、日本の古典芸能の極意があると言うのだ。

ふつつ、西洋音楽であれば、バイオリンにしても音がずつとつながっていくことで、当然緊張感もつなぐと思うのだが、日本の音楽はそうではない。切って、切っていく、そのことによって緊張感を盛り上げてゆくのだ。同じことが連続していたら、むしろベタツとなり、だれてしまう。

とくに能・謡曲の場合、ある型と型がある。その間隙、一つの型から一つの型に移るその瞬間が重要だ。それをベタツと一本調子で、同じリズムに乗ってやっではない、連続的にやっではないと世阿弥はいう。

ではどうするか。世阿弥はなんと「間を抜く」といつている。間を入れるのではない。間を抜くのである。

規則的に手拍子でトントコ、トントコ打つリズムは、そのまま間がいいだろう。その間をはずす。そうすると技と技のあいだに何ができるかという、世阿弥は「せぬ暇」だという。せぬ暇というのは、無である。暇というのは間をはずすことだ。

だから、間を抜いて技と技のあいだに「せぬ暇」をつくること。これが逆に「間」だということになる。むしろ不連続で切っていくことで、次に何が起くるか、何が起くるか、その驚きと期待の緊張感を盛り上げていくことが大事だ。これが「間」を大事にすることだという。

たしかに、鼓にしても、音が切れて、私たちが次を待っているうちに、だんだん力がこもっていき、もう鳴るか鳴るかと思っていよいよ待ち切れないというまさにその瞬間に、しじまを破ってポンと入る。

つまり連続的にしないで、切って、切って、その切った瞬間に凝集していく。三味線などもそうである。三味線は弦楽器だが、人類史上、もともと古い楽器は、弦楽器の原型といわれるハープである。簡単にいえば、木の枝に糸を張って弦を作る。これをペンペンはじけば、そのまま音が出てすぐ楽器

になる。

私はメソポタミアの廃墟^{はいきょ}で、実際に盲目^{もうもく}の老人が木の股に糸を張って、ぶつぶつと呟^{つぶや}くように弾き語^ひっては、投げ銭を集めるのを見たことがある。これを進化応用したのがハープである。メソポタミアでもギリシャでもインドでも、古い弦楽器はみなペンペンとはじいていた。ところがあるとき、大天才が馬の尻^{しつ}っぽかなにかの毛で、弓^{きう}という革命的なものを発明した。これを弦の上に滑^{すべ}らせることによって、連続的な音を出すようになった。こうしてバイオリンの原型が生まれた。

日本にも、すでに奈良時代には中国の唐を通じて、ペルシアから胡弓^{こきう}が伝来していた。ところが、日本人はこれをあまり好まなかった。弓を使ったバイオリン風の楽器は、その後も入ってきてはいるのだが、結果として日本に根づくことはなかった。残ったのは琵琶^{びわ}や、三味線、鼓など、音を切っていく楽器ばかりである。

間から間へと断続する緊張感を呼吸していく。呼吸が大切、息が大切。すべて気が大切という日本人の芸術の本質には、そういうものがある。

(栗田勇著『日本文化のキーワード』より)

注1 コンセプト：企画などで、全体をつらぬく統一的な考え方。

注2 前衛：芸術活動で、もつとも先進的な創作を試みること。

注3 所期：期待していることがら。

注4 間隙：すきま。

注5 能：日本の伝統芸能のひとつ。

注6 世阿弥：室町時代初期の能役者・能作者。

注7 謡曲：能の台本。また、それに節をつけてうたうこと。

注8 しじま：物音一つなく、静まり返っていること。

問1 本文中の空らんA～Eについて、次の問いに答えなさい。

(1) 空らんAには「まさに自分の思うとおりである。」という意味の言葉が入ります。次のア～エの中からこの意味に当たるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア わが意を決したり イ わが意を尽くしたり ウ わが意を得たり エ わが意を用いたり

(2) 空らんB・Cに入ることばを、それぞれ本文中より漢字二字でぬき出して答えなさい。

(3) 空らんDに入れるのにふさわしいことばを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 剣の空間 イ 技の空間 ウ 無の空間 エ 真の空間

(4) 空らんEには「緊迫した状態」のことをたとえた四字熟語が入ります。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一刀両断 イ 一心不乱 ウ 一進一退 エ 一触即発

問2 線部①「間が抜ける」の「間」の意味を、本文中の※の(1)～(5)の中から一つ選び、番号で答えなさい。

問3 線部②「その正体はと問われると、これに答えるのは、なかなかむずかしい」について、次の問いに答えなさい。

(1) 何を「問われる」「答える」と筆者は言っていますか。本文中の言葉を使って十字以上十五字以内で答えなさい。
(2) 「なかなかむずかしい」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した以下の文の空らんA・Bに当てはまることばを、本文中からそれぞれ指定された字数で書きぬきなさい。

私たち日本人が日常よく用いている「間」という言葉は、たくさんのとらえ方があって、**A** (四字)であり、**B** (二字)な言葉であるから。

問4 線部③「これを外国語に翻訳^{ほんやく}する」としたら、さぞかし困るであろう」とありますが、なぜ「間」は「外国語に翻訳する」としたら、さぞかし困るのですか。その理由を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「間」を無意識に使い分け、理解できるのは日本人だけであり、西欧の考え方には全くないから。

イ 「間」は西欧の理性にのっとった考え方や生き方では理解できない日本文化の特質であるから。

ウ 「間」を理解するには日本人そのものの生き方や考え方の全てを理解しなくてはならないから。

エ 「間」は西欧の世界からみると異質なものであり、簡単に理解できるようなものではないから。

問5 線部④「間が悪い」について、次の問いに答えなさい。

(1) 意味を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 運が悪い イ 調子が悪い ウ 関係が悪い エ 相性が悪い

(2) このことばは、何を表現するとき用いられますか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人の理性 イ 人の生き方 ウ 人の傾向 エ 人の知識

問6 線部⑤「対照的な用法」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「対照的な用法」の内容を次のように説明しました。以下の文の空らんA・Bに当てはまることばを、本文中からそれぞれ指定された字数で書きぬきなさい。

「間」には、「間を取る」など**A** (九字)場合と、「間が抜ける」など**B** (十字)がなくなってしまうことを意味する場合がある。

(2) 「対照的な用法」を示すことによって、筆者が伝えたいことを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実体のないものが重要な作用や働きをしているということ。

イ 人間と自然との関係が重要な役割を果たしているということ。

ウ 時間と空間には、明確なはじめというものが全くないということ。

エ 「間を取る」と「間が抜ける」には、ある共通点が存在するということ。

問7 線部⑥「リピート」、⑧「デリケート」とありますが、これを言い換えたものを、それぞれ次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(1) 「リピート」：ア 停止 イ 再生 ウ 反復 エ 伸縮

(2) 「デリケート」：ア 大胆 イ 私的 ウ 複雑 エ 繊細

問8 線部⑦「のびちぢみするリズム」の説明として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同じリズムに乗って連続するリズムのこと。

イ 緊張感がずっと持続するリズムのこと。

ウ 間をはずして断ち切るリズムのこと。

エ 一本調子でベタツとしたリズムのこと。

問9 線部⑨「日本の古典芸能の極意」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「日本の古典芸能の極意」は、どういうところにあると世阿弥は言っていますか。本文中より十四字でぬき出して答えなさい。

(2) 「極意」の「極」と同じ読み方をする漢字を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 極力 イ 極上 ウ 極小 エ 極限

問10 線部⑩「緊張感を盛り上げてゆく」とありますが、どのように「緊張感を盛り上げてゆく」と世阿弥は言っていますか。「～」と言っている。

につながるように、本文中のことばを使って四十文字以内で答えなさい。

問11 線部⑪「一つの型から一つの型に移るその瞬間」に世阿弥は何をつくることが大事であると言っていますか。本文中から五字以内でぬき出して答えなさい。

線部⑫「バイオリンの原型」となった楽器は何ですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三味線 イ 胡弓 ウ ハープ エ 琵琶

問13 線部⑬「結果として日本に根づくことはなかった」とありますが、なぜ日本では弓を使う楽器が定着しなかったのですか。その理由として正しいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本では、三味線や鼓のように弓を使わない楽器が古くから愛用されてきたから。

イ 日本では、中国の唐を通じて伝わってきた楽器が、日本文化とは合わなかったから。

ウ 日本では、音を切って、連続的な音を出さないで演奏する楽器が好まれたから。

エ 日本では、ギリシャやインドなどの古い弦楽器が伝来した時期が遅かったから。

問14 この文章の内容として適当ではないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「間」というものは、内面性をひたすら持続することにあると世阿弥は言う。

イ もともと「間」というものは実体がないので、大したことはないものである。

ウ 呼吸と息を大切にし、すべて気が大切というのが日本人の芸術の本質である。

エ 日本人は「間」ということばを無意識に使い分けて、日頃から口に使っている。

国語解答用紙

受験番号

氏 名

中学一般第1回

⑥		①	
早業		シンソウ	
⑦		②	
吹雪		バイバイ	
⑧		③	
真似		ホシヨウ	
⑨		④	
留意		イジヨウ	
⑩		⑤	
均一		オゴソ	

二

問2

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

問3

a

b

最初

最後

問4

最初

最後

問5

問6

問7

問8

第二

第三

問9

b

a

三

問1

(1)

(2)

B

C

(3)

(4)

問2

問3

(2)

A

B

問4

問5

(1)

(2)

問6

(2)

A

B

問7

(1)

(2)

問8

問9

(1)

(2)

問10

問11

問12

問13

問14